

44

『長生療養方』と『喫茶養生記』における  
「桑」関連の比較考察

誌上発表

小磯まり子

武蔵野学院大学大学院後期博士課程国際コミュニケーション専攻2年在籍

『長生療養方』（1184）全二巻は、釋蓮基（生没年不詳）の撰述によるもので、巻第一には、三十項を挙げて養生のことを述べ、巻第二では、十五項の治療方を挙げている。『長生療養方』は、『医心方』（984）が基とした中国医書に依拠したもので、蓮基は、平安時代後期から鎌倉時代初期の僧医で、丹波氏の族である。一方『喫茶養生記』（1211）全上下巻は、栄西（1141-1215）が養生の仙薬として、茶の効能を説いた養生書である。その下巻には五種の病状に「桑」の効能による記述がある。両者は同時代を生きた僧でありながら、生活背景を異にして、それぞれの立場で、養生書を撰書している。これらの背景を基調に、『長生療養方』と『喫茶養生記』両者における、異同調査によって比較対照し、歴史上の推移の背景から考察をするものである。

【考察】①『長生療養方』には、四種の病状の記載がある。記載頻度は、消渴（糖尿病の説）23例、中風3例、瘡病24例、脚気7例である。「桑」関連使用部位は「桑上寄生」「桑根白皮」「桑螵蛸」「桑根」「桑椹」等がある。「桑椹」だけは、「補五臓耳目聰明通血脈益精神消渴」とあり、消渴の治療に用いられている。使用方法は他の漢方原料と一緒に煎じる。解説に私云を表示し、『医心方』にはない特徴がある。院政期文化人貴族に向けた特権階級に対応するものである。しかも当時の貴族の間では、消渴（糖尿病の説）と瘡病が流行していた社会背景が浮上してくる。②『喫茶養生記』下巻の病状は、飲水病（喉の渇く病気か＝糖尿病か）、中風、不食病、瘡病、脚気の五種である。「桑」の使用部位は、「桑の枝」「桑椹」を使用して、服用方法については「桑粥」「桑湯」を奨めている。

【解析】①蓮基の『長生療養方』（1184）撰書から27年を経過した後、栄西の『喫茶養生記』（1211）は刊行された。前者は、四種の病状を指摘し、後者は五種（不食病を追加）の病状を指摘した。治療効果を求める対象は「桑」であるが、使用方法と使用部位は異なる。②両者の著書から、当時の流行病状況が反映され、治療対応策を講じている社会現象の背景が窺える。③栄西の『喫茶養生記』に病名の表示ではなく、病状の表示に反映されている。例えば、飲水病（病状）＝消渴病（病名）＝糖尿病（病名）、不食病（消化各内臓器官の病変と精神的病変などの影響による病状で病名ではない）等である。④「桑」の使用部位においては、蓮基は多くて異なる。

栄西の使用部位は「桑の枝」「桑椹」である。使用方法は「桑粥」「桑湯」と少なく、より簡単である。当時の日本の生活習慣に浸透し、普及し易い特徴がある。

【まとめ】『長生療養方』は、専門医薬研究家系の背景にある専門書である。貴族社会流行病の治療方法に「桑」を奨めた。『喫茶養生記』は、仏教の研究、修行僧が、養生文化への提唱者として、著した専門書で、前者と同じ視点から、時の為政者武門社会と禅宗布教の必要性に、同じく「桑」を提唱した。しかし、病状の指摘、使用部位、使用方法等に、蓮基との「桑」の奨め方には相違がある。これは、栄西が宋留学の見聞を、実際に体験した関係である。『喫茶養生記』における「桑」の効能と、使用方法の記述由来の根元は、又、他にある可能性は否定できない。